配布部数 27 万 1516 部（日本 ABC 協会公査）

LIVING

2024年2月17日 1429号
次回発行は2月24日付です。
リビング かごしま
毎週土曜日付発行 無料
発行／南日本リビング新聞社
記事・広告……TEL.099・222・7288
配布に関して……TEL.099・239・8124
■価格は、特別に表記しているもの以外は税込価格です
■掲載している情報は２月９日現在のものです。変更になる場合もあります

知って、防ごう

「子宮頸がん」ってどんな病気？

最近、20代～30代の若い女性に増えてきている「子宮頸（けい）がん」。初期はほとんど症状がないため、気付いた時には、進行していたというケースも少なくありません。今回は、この女性特有の子宮頸がんについて考えます。

発症年齢のピークは30代、別名〝マザーキラー〟

子宮のがんには「子宮体がん」と「子宮頸がん」の2種類があり、子宮の入り口にできるのが「子宮頸がん」です。

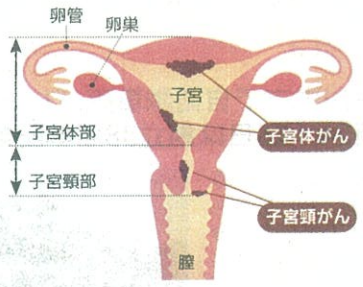
「どちらも〝子宮〟と付いているので似ている感じがしますが、原因や発症しやすい年齢も異なる別の病気です」と話すのは、鹿児島大学医学部産科婦人科の教授、小林裕明さんです。

日本では毎年、約1万1000人が新たに子宮頸がんと診断され、年間で約2900人が亡くなっています。原因はほとんどが、性交渉によるウイルスへの感染です。

「性交渉の低年齢化などにより、近年若い世代の発症が増えています。発症年齢のピークは30代。出産年齢と重なることもあり、治療で命が助かっても妊娠できなくなるなど、女性の人生に大きな影響を及ぼすことが多いです」と指摘します。

「子育て世代の母親が子どもを残して亡くなるケースもあり、別名〝マザーキラー〟とも呼ばれる子宮頸がん。原因や症状、そして私たちができる対策について、小林さんに聞きました。

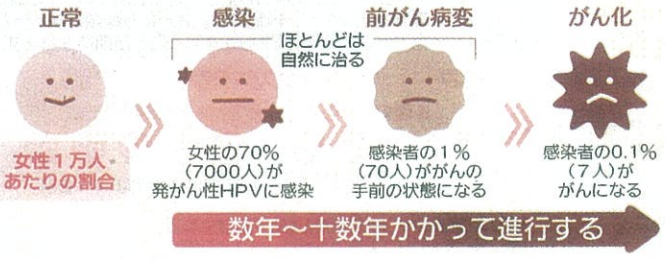
子宮頸がんの年齢別罹患率 2019年（※）
（上皮内がん含む）



※出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」（全国がん登録）

原因は、HPVというウイルスの感染

子宮頸がんは、ほとんどが「ヒトパピローマウイルス（HPV）」というウイルスの感染が原因です。このウイルスは、性交渉によって感染します。**女性の70%が一生に一度は発がん性のHPVに感染する**といわれる、ごくありふれたウイルスです。感染しても多くの場合、免疫機能が働いてウイルスは自然と体から消えますが、この機能がうまく働かずに感染が長く続くと、がんへ進行する場合があります。



教えてくれたのは
鹿児島大学医学部産科婦人科　教授
日本婦人科腫瘍学会　婦人科腫瘍専門医
小林 裕明さん

症状は？ 初期は症状がほとんどない

初期は、ほとんど自覚症状がありません。進行すると、性交渉の際に出血したり、血の混ざったおりものが出たりという症状がみられます。さらに、がんが子宮の外に広がると、骨盤や下腹部の痛みなどが出ることもあります。

進行した場合の自覚症状
- 性交渉の際に出血する
- 生理の時以外に出血する
- 普段と違うおりものが増える

治療は？ ステージⅠ期でも子宮全摘のケースが多い

「前がん病変」（がんになる手前の状態）
完全ながんになる前であれば、子宮頸部の一部を円錐（えんすい）状に切り取る手術や、レーザー治療が行われます。子宮は残すことができるので、妊娠・出産は可能です。

ステージⅠ期、Ⅱ期
子宮を切除する全摘出術が標準的な治療です。早期といわれるⅠ期でも子宮を失うケースが多く、妊娠できなくなってしまいます。

ステージⅢ期、Ⅳ期
手術でがんを完全には取れないため、放射線治療や抗がん剤治療が行われます。

◎２面では、子宮頸がんの予防について紹介

子宮頸がんから守る2つの方法
「ワクチン」と「がん検診」

子宮頸がんを防ぐためにできることは2つあります。1次予防としてHPVの感染そのものを防ぐ「ワクチン接種」、そして2次予防として、がんになる前の段階や初期で発見する「がん検診」があります。

子宮頸がんで妊娠・出産を諦める患者さんを多く見てきました。そんな女性が1人でも少なくなるよう、ワクチンと検診で予防しませんか

鹿児島大学医学部産科婦人科
教授 小林 裕明さん

HPVワクチン

性交渉を経験する前の接種が、最も効果的

「HPVワクチン」は、子宮頸がんの原因であるHPVの感染を予防します。防ぐことができるHPVの種類（型）によって3タイプあり、昨年春から定期接種の対象に加わったのが、9種類のHPVを防ぐ「9価ワクチン」です。

「9価ワクチンは子宮頸がんの原因となる、発がん性HPVの90%ほどを防ぐことができます。既に感染しているHPVを排除する効果はないので、性交渉を経験する前の接種が最も効果的です」と小林さん。定期接種の対象は、小学校6年生から高校1年生相当の女子です。

HPVワクチンを巡っては、接種後に体の痛みなどの多様な症状が報告され、2013年から国が積極的な接種勧奨を中止。2022年に、安全性が確認されたとして再開された経緯があります。

「報告された症状は、ワクチンを接種してない同年代の女性にも一定数見られる症状で因果関係を疑うには根拠が乏しいもの、またはワクチンの成分ではなく接種への不安がきっかけで生じたもの、と考えられています。HPVワクチンは、海外では120カ国以上で公的な予防接種として行われ、接種が進んだ国では、既に子宮頸がんが減少してきています」と小林さんは話します。

中止していた期間に接種できなかった人は、「キャッチアップ接種」として来年3月まで公費（自己負担なし）で接種することができます。

定期接種対象者

小学校6年生～
高校1年生相当の女子

キャッチアップ接種対象者

1997年度～2006年度
生まれで、ワクチン接種
を完了していない女性

期間は来年3月まで
今年9月までに1回目の接種が必要

▶9価ワクチンの一般的な接種スケジュール◀

1回目の接種を15歳になるまでに受けると2回でもOK	0カ月 1回目 → 6カ月 2回目	合計2回
1回目の接種を15歳になってから受ける場合は3回	0カ月 1回目 → 2カ月 2回目 → 6カ月 3回目	合計3回

副反応　ワクチンが起こす副反応として、接種後に接種部位の痛みや腫れ、赤みなどの症状が時々起きます。ごくまれに、重いアレルギー症状が起こることもあります。

▶ワクチンは「2価」「4価」「9価」の3タイプ◀

どれもHPVを防ぐワクチンで、公費で受けられます。子宮頸がんの原因の約70%を占める2種類（16型と18型）を防ぐのが「2価」。これを含む4種類を防ぐのが「4価」です。さらに5種類が加わった「9価」は、子宮頸がんの原因の約90%を防ぐことが期待されます。

●高リスク型HPV（子宮頸がんなどの原因になる）
○低リスク型HPV（尖形コンジローマなどの原因になる）

がん検診

20歳から定期的な検診を

子宮頸がん検診は、がんになる前の異常な細胞や、初期のがんを見つけるための検査です。「がんになる前の段階〝前がん病変〟で発見することができれば、子宮頸部の一部を切除するなどの治療で、子宮は温存できます」と小林さんは話します。

しかし、日本の子宮頸がん検診の受診率は43.6%（2022年国民生活基礎調査）。「世界各国と比べると低い水準で、特に若い世代の受診率が低いのが問題です」

検診は医療機関の他、自治体の検診でも受診できます。無料、または一部の自己負担で受けることができますので、20歳を過ぎたら定期的にがん検診を受診しましょう。

なお、ワクチンでは防げない種類のHPVもあるので、ワクチンを接種しても、定期的ながん検診の受診は大切です。

▶子宮頸がん検診◀

子宮の入り口部分の表面を、ブラシで軽くこすり、細胞を採取して検査します。検査は1～2分程度で、痛みはほぼありません。